

国内経済情勢

概観

設備投資の盛り上がりや個人消費の堅調を背景に、総需要は根強い増勢を続けている。2月の生産、出荷は減少を示したが、これまでの増加基調に格別の変化が生じたとは思われない。商品市況面では、鉄鋼などは低落を続けているが、総じてみると堅調な地合いが続いている。また、労働力需給も引き締めぎみに推移している。

金融面をみると、中小企業の借入需要が増勢を続けているほか、大企業についても、いまだ本格的な借入需要が現われるには至っていないものの、手元の余裕がややせばまっていることもあり、一部には動意がみられはじめている。

2月の国際収支は、総合で14百万ドルの黒字となった。原燃料を中心に高水準の輸入が続いている一方、輸出には伸び悩みの気配がうかがわれる点は注目を要する。

生産、出荷の増加基調変わらず

鉱工業生産(季節調整済み)は、1月の大幅増加のあと、2月は速報で前月比 -1.7% と久方ぶりに減少した。これには前月著増した鉄道車両、運搬機械などの反動減、建国記念日制定に伴う生産日数減などの要因も響いており、1月、2月をならしてみると、これまでの増加基調に格別の変化

が生じたとはみられない。

鉱工業出荷(季節調整済み)も、2月(速報)は前月比 -2.2% とかなり減少したが、生産とほぼ同様の事情によるものとみられる。財別には、各財とも減少しているが、とくに前月急増した輸送機械(鋼船、鉄道車両)や土木建設鉱山機械、運搬機械などの減少が目立っている。

2月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比 -0.4% と減少したが、最近の動きをならしてみると、ほぼ横ばいぎみに推移している。また、メーカーの原材料在庫はいくぶん上昇傾向を示しているが、販売業者在庫は大勢横ばいを続けており、全体として、在庫投資の増勢はなおゆるやかに推移しているようである。

一方、設備投資は、鉄鋼、自動車、石油精製、電気機械などを中心に一段と活発化する勢いをみせている。2月の機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は前月比 -2.6% の減少を示したが、3ヵ月移動平均でみると、11月 $+16.2\%$ 、12月 $+18.6\%$ 、1月 $+9.2\%$ となお相当のテンポで増加している。最近発表された設備投資に関する各種の予測調査によれば、大企業では大幅な増加が見込まれている。

この間、労働力需給は引き締めぎみに推移し、賃金は根強い騰勢を示しているが、こうした事情を背景に、個人消費は堅調を続けている。最近、全都市全世帯の消費支出がかなり増加してい

ることや、全国百貨店売上げが好調に推移していることは消費堅調の一面を示すものとみられる。

鉄鋼などに訂正安の動き続くも商況の地合いは堅調

最近の商品市況をみると、鉄鋼、非鉄(鉛、亜鉛)はなお低落を続けている。これに対し、繊維は綿糸が急騰して人気化の様相を強め、その他の品目も堅調に推移したが、3月末近くには綿糸に高値訂正の動きが生じている。この間、灯油、セメント、基礎薬品類、紙、木材などはおおむね堅調場面を続けている。

このように、主力商品の足取りはやや異なった動きを示しているが、需要の根強い増加にささえられて需給地合いは依然堅調を続けている。

なお、久しく市況の下ざきえ要因となっていた不況カルテルは、2月から3月にかけて相次いで撤廃され(綿・スフ、砂糖、一部段ボール原紙)、不況カルテルはすべて姿を消すに至った。

本行卸売物価は、鉄鋼、非鉄の反落が響いて、2月は前月比+0.1%と小幅上昇にとどまったあと、3月にはいつてからも、上旬は+0.1%、中旬は-0.2%と落ち着きぎみに推移している。

一方、消費者物価(東京)は、2月は野菜などの値上がりにより、3月は衣料、くだものなどの上昇により、それぞれ前月比+0.5%、+0.4%と続騰し、年度間平均では前年度比+4.7%の上昇となった。

預金、貸出は大幅に増加

2月の銀行券は通月底堅い動きを続け(月中増発額747億円、前年506億円)、月中平均発行高の前年比増加率は+16.3%とさらに水準を高めた。

一方、財政資金も主として租税等の受入れ好伸から相変わらず引揚げ傾向が強く、受超幅は2,175億円と前年(1,493億円)を大幅に上回った。このため金融市場は引き締めぎみに推移し、下旬にコール・レートは翌日物、無条件物が1厘、月越物が5毛上昇した。この間、本行は、国債、政保債および金融債の買入れや短資業者向け貸出を実施して需給の円滑化に努めた。

3月にはいつてからも、銀行券は根強い増勢を続け(月中増発額410億円、前年293億円)、月中平均発行高の前年比増加率は+16.1%と、高水準に推移した。しかし財政資金は租税収入が引き続き多額に上った反面、年度末の関係から下旬には公共事業関係費の支払や資金運用部の地方貸が集中したため166億円の払超(前年537億円の払超)となった。かかる情勢のもと、目先季節的な緩和期を控えて都市銀行のコール取入れ態度が落ちてきたこともあって、金融市場は繁忙のうちにもさしたる波乱なく推移した。なおコール・レートは、金融緩和期を迎えて4月1日以降各条件物とも1厘低下し、1月前半の水準に戻った。

2月の全国銀行勘定をみると、実質預金の増加額は月中1,543億円(前年423億円)と大幅に増加した。一方、貸出も不要資月にかかわらず、前年(1,265億円)の2倍に近い2,337億円の増加を示した。かかる預金、貸出の急増には、金融機関が期末預金増強を旨として例年より早目に貸し進んだことが相当響いている点はいなめない。しかし、企業側の態度をみても、中小企業では、増産・増設などに伴う借入需要が増加している。また、大企業でも、これまでの借控えと企業活動の活発化

から手元の余裕がせばまりつつあることもあって、借入依存度を徐々に高めようとする動きが一部にみられはじめている。こうした動きは、鉄鋼をはじめ非鉄、化学、電気機械、合繊などかなり多くの業種に広がりつつある模様であり、一般に、先行きの金融情勢についての関心も次第に高まっている。ただし、総じてみると、これが本格的な借入需要となって現われるまでには至っていない。貸出金利も低下傾向を続けている。

公社債市況の動向をみると、先行きに備えて都市銀行の手持ち債売却意欲が強まっているのに対し、買手側金融機関が買控えの態度を示していることなどから、需給の引きゆるみが表面化し、このため上場相場ならびに店頭気配とも小幅軟化を示した。

なお、3月の国債発行額は、最近における自然増収の動向にかんがみ、当初の予定額(資金運用部引受け300億円、市中引受け400億円)が大幅に削減され、一般個人消化分(50億円)のみにとどめられた。

輸出に伸び悩み気配

2月の国際収支(IMF方式)は、経常収支が小幅ながら黒字となったうえ、資本収支の赤字幅も少なめにとどまったため、総合収支では14百万ドルの黒字となり、季節的な関係から大幅逆調(230百万ドル)となった前月より著しく好転した。も

っとも、前年同月比でみると、貿易収支の黒字幅縮小を主因に、総合収支の黒字はかなり減少している。なお、外貨準備は2百万ドルの小幅減少となった。

2月の輸出は、前年同月比で+13%の増加となったが、前2か月の平均伸び率(+16%)をやや下回っており、季節調整後の実勢でも若干減少している。通関ベースで品目別の動きをみると、船舶、自動車、民生用電機、合繊などは相変わらず好伸びしているが、鉄鋼、綿織物、肥料などは伸び悩んでいる。このように、輸出の増勢は、このところやや鈍化しているが、先行指標面でも同様の傾向がうかがわれる。2月の輸出信用状は前年同月比-1%と36年10月以来ひきびきに前年水準を下回り、とくに主力の米国向けは停滞ぎみとなっている。

一方、輸入は、鉄鋼原材料や石炭、木材など原燃料の増加を中心に、前年同月比の伸び率は+21%と高水準を続けている。もっとも、季節調整後の実勢では前月よりいくぶん減少し、昨年10~12月の平均とほぼ同水準にとどまったが、輸入承認が一段高となっており、また生産も引き続き増加傾向を示していることなどから推して、輸入は今後もかなりの増勢を続けるものとみられる。

(昭和42年4月4日)